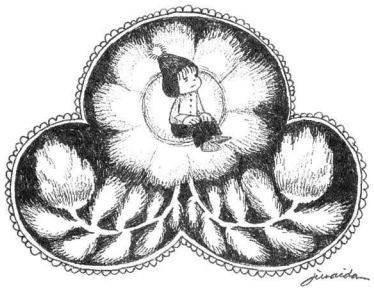
朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ　09〉　junaida

佐佐木幸綱選

年一度一大イベント三世代男七人田植機囲む
（広島市）金田　美羽

残雪の逆さ鳥海山を田植機は波紋広げてゆらりとゆらす
（酒田市）三笠喜美夫

「元バイトですが」と言えば老人はマスクはずしてマスターとなる
（横浜市）山崎　垂

真っ青な海に向かって雪渓をスキーで飛ばす春の鳥海山
（魚沼市）磯部　剛

聴診器を出刃包丁に持ちかえて乗っ込み大鯛を捌く息子は
（長岡市）柳村　光寛

ペリリューの島で戦死して八十年今拾われる兵士等の骨
（神奈川県）高橋　静一

南方の戦場を思い出すからと死ぬまでバナナを食べなかった父
（名古屋市）山守　美紀

洗い熊網戸を破り侵入すしばらく暴れて来た道帰る
（茨木市）窪田　宣子

木の洞に営巣中の表示ありウワーンと飛び交う蜜蜂忙し
（つくば市）藤原　福雄

肩と膝乾いた鼻水ついておりさっきまで此処に子がいた名残
（ひたちなか市）安澤　美幸

トランプの後ろで愛想笑いする男のようなわたしの立場
（金沢市）竹内　一二

四度目の断捨離する手でそっとなで高橋和巳棚に戻しぬ
（東京都）手塚　洋子

【評】第一首、数詞を四つ使って、年に一度の家族的イベントを作品化。第二首、水に映った鳥海山を揺らす田植え機がドラマチック。第三首、昔、アルバイトをしていた店を久々にたずねた場面。下句のユーモラスな表現に注目。

高野公彦選

五能線三十秒の停車中りんごの花の香の無人駅
（五所川原市）戸沢大二郎

「詐欺」「押し買ひ」などなど油断ならぬ世を生きて気を張るひとりの老後
（藤沢市）原　慶子

米・卵作る農家に感謝せむ今までがあまりに安すぎた
（朝霞市）岩部　博道

「この米がもう売れている」田植えする男が政治の無策を言えり
（観音寺市）篠原　俊則

就任一〇〇日してきたことは本人の望むノーベル平和賞に遠し
（水戸市）中原千絵子

武器持たぬ拉致被害者の嘆願に世襲の元首はミサイル飛ばす
（生駒市）辻岡　瑛雄

退職せし女医先生の診察室やはらかき言葉漂ひてゐる
（岡山市）岩藤由美子

クリニック近くの神社で祈ってる診察前の若きドクター
（横浜市）滝　妙子

限りなく欲しがり満足しないのが貧しさと言いしムヒカ氏逝きたり
（秩父市）畠山　時子

好きことが何もなかった一日過ぎ雲の晴れ間に光臨の月
（横浜市）中村みち子

「田園」を聴けば感謝の気持ち湧く父、母、大地、この惑星に
（西条市）村上　敏之

大谷にまた大の里に元気貰う奏えしこころに大の字は効く
（静岡市）名田　幸一

【評】1首目、青森県五所川原市を通って秋田県能代市に向かう五能線に乗ると、こんな楽しみがある。2首目、高齢者を狙う犯罪者がいる時代に気を張って生きる作者。3首目、4首目、米価高騰の問題にそれぞれの光を当てる。

川野里子選

ノイズの中に宇宙語を見つけたとでも言うように赤子泣き止む
（八王子市）間渕　昭次

山笑ふなかに笑はぬ山ありて御巣鷹山は永久の霊峰
（前橋市）荻原　葉月

夜のうちに鯉跳ね出でて死すといふ、龍になるべき時の来たらむ
（東京都）薫々　歩知

残雪の不思議なくぼみは大熊が積丹の海を眺めていたよう
（盛岡市）榎本　拓

隣の薔薇が気高く五月の風に揺れそれはそれはもう流刑地のごとし
（京都市）森谷　弘志

カタッカタッと刃先を骨に沿わせつつ切り分けている鰹の命
（四日市市）諏訪　花

兵役は終わったのかと問われたり西ドイツにて二十一の春
（酒田市）三笠喜美夫

あぁあの子の親だと分かる相槌の温度が似てる保護者面談
（柏市）伊藤　智紗

親鳥の近づかざりし窓際の枝に雛来て吾と真向ふ
（アメリカ）中條喜美子

ゆくりなくわたしはわたしにとどまれり天動説と地動説の間に
（横浜市）小林　瑞枝

農場へメダカの水を替えに行くただ一コマの恋の思い出
（下呂市）河尻　伸子

旅先のケンカが少し残ってる大涌谷のくろたまごにも
（東京都）鈴木ベルキ

【評】一首目、赤子は大人の聞けない言葉を聴くのか。三首目、大きな鯉か、ついに龍になった。四首目、雪の穴に物語が見える。五首目、薔薇の美しさが心を漂泊させるのだ。十首目、天動説、地動説、しかし「私」は「私」だ。

うたをよむ　写実の幻想性

川野　芽生

灯さずにゐる室内に雷させば雷が彫りたる一瞬の壜
『声影記』

小原奈実の第一歌集『声影記』（港の人）が刊行された。待望の、という言葉がこれほど相応しい歌集も他にあるまい。

端正な文語で構成される、理知的な文体。鋭い観察眼に裏打ちされた写実。それが暴き出すのは、写実は極めれば幻想へ接近していくという事実である。顕微鏡が発明された時に人々を襲った驚きはこのようなものであったろうか。

暗い部屋に稲光が差し込むと、置かれていた硝子壜が光の中に浮かび上がって、再び闇に沈む。掲出歌が描くのはそれだけの光景だが、はっとするほど鮮やかだ。文体の緩急も見事で、ゆったりとした上の句に対し、下の句は紫電一閃、歌の後に再び訪れる闇の中で反芻して、目にしたものを初めて理解する。闇に挟まれた一瞬の光と、その光のもと、エッチングのような細い線で空間に刻み込まれた透明の壜が、闇を変質させる。

時をやや先に行かせて道の辺に鳥の散らせる花を浴びゐつ
置時計売場の正午つと過ぎて正午を飾る楽あふれたり

文体とあいまって、時間の感覚が美しい。一首目、時に急き立てられるように歩いていても、花の下に立ち止まる折には時という同伴者からわずかに離れ、エアポケットのような時間を楽しむ。二首目、十二時を知らせるとりどりの時計の音を、「正午を飾る楽」と捉えると、まるで天体の音楽のように思われる。短い歌の中に、時間が幾重にも流れているかのようだ。

（歌人）

◆「永田和宏選」は選者が海外出張のため休みます。

風信　第68回短歌研究新人賞　短歌研究社主催。霧島あきらさんの「正しい椅子」（30首）に決まった。

◇朝日歌壇　入選取り消し　6月1日付の歌壇に掲載した「徘徊の母は窓から抜け出して探しぬ十五で逝った弟」は二重投稿でしたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。